様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	自然系コース（理科） ／工藤　慎一

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され，教員の研究費配分も厳しくなってきており，教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで，科研費申請に向けて，あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1．目標・計画

私個人の内定済みの科研費課題に関しては，本学に申告済みである。さらに代表者として新規申請中の課題もあり，今後の申請に関する詳細は採否の判明以降に考えざるを得ない。科研費を始め我々の公的研究費は国民の税金に基づいており，従って，最少の研究費で最大の研究成果を挙げることが理想であることは言うまでもない。研究課題によっては，外部資金に頼ることなく経常経費の範囲内で十分に実施可能なものも少なくないであろう（事務棟の新規建設を予定する程，予算に余裕のある本学ではなおさらである）。研究成果ではなく，研究費獲得自体を一律に教員個人の目標に掲げることを強要することは，まさに税金の無駄遣いを強要することと同義である。このような目標を設定する当事者の見識を疑わざるを得ない。

2．点検・評価

「捕食リスク・非致死的捕食経験に応じた亜社会性ツチカメムシ類の繁殖投資」の課題名で，研究代表者として新たに科研費を申請し採択された。
なお，「研究成果ではなく，研究費獲得自体を一律に教員個人の目標に掲げることを強要することは，まさに税金の無駄遣いを強要することと同義である」との懸念を教授会で表明したにも関わらず，このような目標が撤回されなかったことは甚だ遺憾である。

Ⅰ－2．大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で，あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか，具体的に示してほしい。

1．目標・計画

これは基本的に大学院運営上の問題であり，運営サイドにいない教員個人が解決できる，そして教員個人に解決を強要されるべき問題であるとは到底思えない。それでも敢て述べるとすれば，潜在的な大学院入学者の希望する多様な就学・研究内容を著しく制限し，その結果として本学大学院への入学断念を招いている，コアカリと称する一連の必修授業の選択化あるいは撤廃に向けて，コース会議や教育部会議で意見集約に努め，しかるべき場に提案することを主張したい。

2．点検・評価

潜在的な大学院入学者の希望する多様な就学・研究内容を著しく制限し，その結果として本学大学院への入学断念を招いている，コアカリと称する一連の必修授業の選択化あるいは撤廃，さらに大学院生のみならず学部学生の就学にも甚大な悪影響を与えている長期履修生定員を無視する大学院入試の見直しに向けて機会ある毎に発言した。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

教室内セミナーや研究指導，論文執筆指導などを通じて，学生・院生の研究指導を熱意を持って行い，自然科学の最前線に触れさせることで，学生・院生の論理的思考能力の向上を目指す。

2．点検・評価

教室内セミナーや研究指導，論文執筆指導などを通じて，学生の指導を熱意を持って行った。その結果，学生自ら卒業研究の成果の一部を専門学会で発表する（小笠航・小汐千春・立田晴記・工藤慎一．フタイロカミキリモドキ奄美群島個体群の後脚アロメトリーと性選択．日本昆虫学会第72回大会）などの成果をあげることができた。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

従来通り，「親の投資進化」に関する課題を中心に研究を推進する。特に，20年度まで科研費を受けて進めてきた「ヒラタヤスデの繁殖生態」ならびに21年度から科研費を受けて進めている「ツチカメムシ類の栄養卵生産と種子給餌」に関する研究成果を論文として国際学術誌に投稿することを目指す。

2．点検・評価

科研費研究課題「ツチカメムシ類の栄養卵生産と種子給餌」の成果の一部が，国際学術誌に受理・公表された（Nakahira, T., K. D. Tanaka & S. Kudo. Maternal provisioning and possible joint breeding in the burrower bug Adomerus triguttulus (Heteroptera: Cydnidae). Entomological Science, 16: 151-161）。また，別の成果も国際学術誌に投稿中である。

Ⅱ－3．大学運営

1．目標・計画

学内委員会委員に就任した際は，教育部並びにコースと連絡を密に取って適切な活動を行う。

2．点検・評価

安全管理委員会委員及び臨床研究倫理審査委員会委員として，教育部並びにコースと連絡を密に取って適切な活動を行った。

Ⅱ－4．附属学校・社会との連携，国際交流等

1．目標・計画

日本動物行動学会の運営委員として，国際学会誘致や学術誌の改革など懸案事項の審議を積極的に進める。
エディトリアル・ボードやレフェリーとして国際学術雑誌の編集に責任を持って携わり，日本の基礎科学に対する国際社会の信頼を損なわないように努力する。

2．点検・評価

日本動物行動学会の運営委員ならびに新たに就任した副会長として，懸案事項の審議を積極的に進めた。

Journal of Ethology誌のeditorial boardとして活動した。また，Behav. Ecol.誌など国際学術誌のreviewに携わった。

Ⅲ．本学への総合的貢献（特記事項）